

古代史に遡ろう

第 38 回 - 生駒山地を巡る(はじめに) -

大阪湾から眺めると、東方を遮って金剛生駒国定公園の山々がみえる。その北部は生駒山地と今の地図には表示されている、万葉集に「難波津を漕ぎ出てみれば、神さぶる、生駒高嶺に雲そたなびく」と詠まれた山塊である。生駒山地の周辺は、古代史に登場する遺跡、古墳(群)、神社などが散在し、古代史に登場する地名が残っている。この地域を急がず焦らずゆっくりと、結局6年かけて大凡回ることが出来た。そこでこれから何回かに分けて、ご紹介しようと思う。

この山地の東側は北流して枚方淀川に合流する天野川と、阪奈道路の辺りを分水嶺として南流する竜田川で形成される谷となっている。北のピーク飯森山のさらに北側の交野には、多くの遺跡・古墳などが存在するが、まだ探訪する機会を得ていない。縄文時代の前期から中期まで、山地西側は麓近くまで河内湾が迫っている海辺であった。流れ込む淀川・大和川などの河川の土砂は3000年の時間を掛けて、河内湾を潟にそして湖へと変貌させていった。山地東側を南流する竜田川は歌枕の「紅葉」に名を残しているが、斑鳩の南で大和川本流と合流する。その他富雄川、佐保川、飛鳥川など大和平野を流れる支流をすべて合わせ、本流は深い溪谷となって信貴山の南麓を流れ、現在でも難所とされている亀瀬岩を過ぎるとゆったりとした流れとなる。やがて安堂において石川と合流するが、1704年に大和川の付け替え工事が行われるまでは、この川は河内湖に注ぎ土砂を供給して湖の平野化を助け、また淀川とともにたびたび洪水を起こしてもいた。

古代においては水路を利用することが、最も効率的な物資の輸送方法であった。大和の要地、海石榴市や飛鳥と難波を結ぶ大和川水系を支配することによって、物部氏は力と富を保持し、全盛期にはその隆盛を誇ることが出来た。生駒山地を越え大和と河内を東西に結ぶ陸路には、古代からの名は現在も残っていて、北から清滝峠、暗峠、鳴川峠、十三峠そして竜田道などがある。しかし、峠越の古道は歴史的にも難路と云われてきたように急峻で幅狭く、今ではハイキングに利用されることに限られている。現代の社会の増加した交通量をさばく自動車道路も鉄道も共に、トンネルで山腹を貫通し今は峠を越えることはなく、わずかに阪奈道路だけが峠を越える自動車道で、それから分岐する風光明媚で名高い生駒信貴スカイラインが南北に生駒山地の稜線を走っている。

2009年の早秋のある日そのスカイラインに乗り入って、まず生駒聖天(宝山寺)に詣で、さらに終点まで走って信貴山朝護孫子寺を訪れたのが、この「生駒山を巡る」歴史探訪の始まりである。学園前から阪奈道路を峠まで上ると、スカイラインの入り口がある。入ってしばらく走ると三叉路があり、左に行くと宝山寺の駐車場で、そこから徒歩5分で寺に着く。ケーブルで登り、駅から階段を歩くのがこの寺の参拝にふさわしいのだが、スカイラインを走ること自体も今回の目的の一つなのでやむを得ない。

生駒山は古くは役行者により修験道場として開かれ、空海も修行したことがあるという。だが、江戸時代(1678)に湛海律師が再興し歓喜天を祀ったのが、現在に続く事実上の開山である。宝山寺は真言律宗大本山で本尊は不動明王であるが、鎮守神として祀られた歓喜天(聖天)が商売の神様として大阪商人の信仰を集め、生駒聖天として親しまれるようになった。中門を入ると香煙もうもうとした線香堂がまず目に入る、右手に拝殿がありその奥が聖天堂で、さらに突き当たりの崖に役の行者が般若心経を収めた般若窟があり、今は弥勒菩薩が鎮座している。線香堂の横から石段



●写真：宝山寺聖天堂



●写真：般若窟の弥勒菩薩・望遠による苦心の撮影

を上がると多宝塔が途中にあり、石畳の道の両側には地蔵が並んでいる。太子堂を過ぎて少し上がると、奥の院である。その日は縁日にあたり境内には露店も出て、寺は参詣者で大変賑わっていた。

スカイライン本道に戻り、奈良と大阪の境に聳える生駒山（642m）から信貴山（437m）を結ぶ全長約21kmの自動車専用道路のドライブを楽しむ。途中点在する展望台から、大阪平野が一望でき、視界の良い日は明石大橋まで見えるという。かつて、大和と河内を結んだ古街道「暗峠」を横切るときには、車を止め石畳の昔の街道の面影を見物できる。桜、あじさいなど季節によって沿道を彩る植物が替わり、なかでも紅葉で有名な「紅葉通り」トンネルという絶景が信貴山の近くにあるとのことだが、季節が早すぎ雄大と云われる紅葉を見ることは出来ず、是非その時期に再訪したいものである。

駐車場から朝護孫子寺に向かって派手な赤塗りの長い橋を渡ると、大きな鳥居が寺の入り口にあり、そこから虎も本堂も見えている。蘇我氏と物部氏は当時伝来した仏教の容認についての是非を争っていたが、約1400年前に決着をつける戦いとなった。その戦いに当たり聖徳太子がこの山にきて、朝廷側（蘇我氏）の戦勝祈願を行ったところ、天空遙かに毘沙門天王が虎をお供にして出現、必勝の秘法を授けた、それは奇しくも寅年・寅の日・寅の刻であったという。勝利を収め、「信ずべき山、貴ぶべき山」として、戦後の587年にここに寺が建立されたのである。本堂の舞台からは三輪山・畛傍山をはじめ大和平野が一望でき、眼下には大和川の流れを見ることが出来る。ここには千手院をはじめ宿坊のある子院が多くあり、非日常の世界に身を置きたいという参詣者の人気が高い。



●写真：朝護孫寺 鳥居 虎

この山の南西に当たる八尾の辺りが大和川を支配していた物部守屋の本拠であり、そこにはのちに聖徳太子建立の大將軍寺が建てられ、近くにはその戦いで滅ぼされた守屋の墓もある。このように古代史のいろいろな局面で舞台となった生駒山地の周辺では、所縁の場所の多いニギハヤシに注目し次ぎに取り上げることにした。即ち、磐船神社に降りてきた彼は、石切劔箭神社の祭神でもあり、また記紀にイワレヒコと戦ったと登場する地名の草香江、鳥見などが残っている。イワレヒコは草香江から生駒越えで大和の入ることを諦め、南の熊野へと転進し、最後に鳥見に



●写真：長護孫寺 虎

において勝利を収めるのである。ニギハヤシの息子達の活躍も多彩であり、なによりも物部氏の先祖であることが注目される。ニギハヤシのものと伝えられる墓が白庭台にあると云うが、それはともかく周辺の市・町は史跡・埋蔵文化財などを紹介する資料館を設けているところが多く、それらも訪れて、この地域について見聞を広めるように努めた。さて、それらをどのように整理しようかと資料を眺めている楽しい毎日である。

（岡野 実）

《写真の使用掲載をご許可頂いた吉本吉彦氏に感謝いたします。》